天

あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな
久方のあまつ空にも浮雲のまよはぬ日こそすくなかりけれ

地

産みなさぬものなしといふあらがねのつちはこの世の母にぞありける

峯

おほぞらにそびえて見ゆるたかねにも登ればのぼる道はありけり

山路

いはがねのこゞしき山をてる日にもたゆまずこゆるわが軍人

岩

天地のなしのまゝなるいはがねの姿はことにおもしろきかな

瀧

岩がねにせかれざりせば瀧つ瀬の水のひゞきも世にはきこえじ

磯波

岩が根によせて碎くる荒波のしぶきにくもるいそのまつ原

國

ちはやぶる神の御代よりうけつげる國をおろそかに守るべしやは

思古宮

さくらさく春なほ寒しみよし野の吉野の宮の昔おもへば

田家翁

こらは皆軍のにはにいではてゝ翁やひとり山田もるらむ

讀書

文字をのみよみならひつゝ讀む書の心をえたる人ぞすくなき

歌

天地もうごかすばかり言の葉のまことの道をきはめてしがな
思ふことありのまに〳〵つらぬるがいとまなき世のなぐさめにして

ときにつけ折にふれつゝ思ふことのぶればやがて歌とこそなれ
世の中にことあるときはみな人もまことの歌をよみいでにけり

軍旗

ますらをに旗をさづけていのるかな日の本の名をかゞやかすべく

剣

しきしまの大和心をみがゝずば剣おぶともかひなからまし
あらはさむときはきにけりますらをがとぎし剣の清き光を

鏡

國といふくにのかゞみとなるばかりみがけますらを大和だましひ

寫眞

末とほくかゝげさせてむ國のため命をすてし人のすがたは

軍艦

荒波をけたてゝはしるいくさぶねいかなる仇かくだかざるべき

なみ遠くてらすともし火かゝげつゝ仇まもるらむわがいくさぶね

正述心緒

よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ

述懷

かみつよの聖のみよのあとゝめてわが葦原の國はをさめむ
まつりごとたゞしき國といはれなむもゝのつかさよちから盡して
山のおく島のはてまで尋ねみむ世にしられざる人もありやと
照るにつけくもるにつけて思ふかなわが民草のうへはいかにと
民草のうへやすかれといのる世に思はぬことのおこりけるかな
よの中はたかきいやしきほど〳〵に身を盡すこそつとめなりけれ
たゝかひの道にはたゝぬ國民もちゞに心をくだくころかな
國をおもふみちにふたつはなかりけり軍の場にたつもたゝぬも
おほづゝの響はたえて四方のうみよろこびの聲いつかきこえむ

白雲のよそに求むな世の人のまことの道ぞしきしまの道
なにごとに思ひ入るとも人はたゞまことの道をふむべかりけり

人

世の中の事ある時にあひてこそひとの力はあらはれにけれ

親

國の爲たふれし人を惜むにも思ふはおやのこゝろなりけり

民

ほど〳〵にこゝろをつくす國民のちからぞやがてわが力なる

心

ちかひたるおのが心をしをりにて誠の道をわけつくしてむ
しきしまの大和心のをゝしさはことある時ぞあらはれにける
山をぬく人のちからも敷島の大和心ぞもとゐなるべき

かざらむと思はざりせばなか〳〵にうるはしからむ人のこゝろは

光陰如矢

思ふことつらぬかむ世はいつならむ射る矢のごとくすぐる月日に

神祇

神垣に朝まゐりしていのるかな國と民とのやすからむ世を
國民はひとつ心にまもりけり遠つみおやの神のをしへを

寄神祝

かみかぜの伊勢の内外のみやばしら動かぬ國のしづめにぞたつ

寄道祝

ちはやぶる神の御代よりひとすぢの道をふむこそうれしかりけれ

寄國祝

かしの實のひとつ心に萬民まもるがうれし蘆原のくに
橿原の宮のおきてにもとづきてわが日の本の國をたもたむ

仁

國のためあたなす仇はくだくともいつくしむべき事な忘れそ

行

世の中の人の司となる人の身のおこなひよたゞしからなむ

折にふれて

思ふこと貫かむ世をまつほどの月日は長きものにぞありける

すゝむべき時をはかりて進まずば危き道にいりもこそすれ

うつせみの世のためすゝむ軍には神も力をそへざらめやは

いかならむ事にあひてもたわまぬはわがしきしまの大和だましひ

おのが身にいたでおへるもしらずしてすゝみも行くかわが軍びと

石だゝみかたきとりでも軍人みをすてゝこそうち碎きけれ

國の爲いくさのにはにたつ人に仇なすやまひふせぎてしがな

はからずも夜をふかしけりくにのため命をすてし人をかぞへて

かぎりなき世にのこさむと國の爲たふれし人の名をぞとゞむる

戰のにはにたふれしますらをの魂はいくさをなほ守るらむ

よとともに語りつたへよ國のため命をすてし人のいさをを

くにのため心も身をもくだきつる人のいさををたづねもらすな

思ふことつらぬきはてゝ國民の心やすめむときぞまたるゝ

ちはやぶる神の心にかなふらむわが國民のつくすまことは

國民のひとつごゝろにつかふるもみおやの神のみめぐみにして

いそのかみ古きためしをたづねつゝ新しき世のこともさだめむ

いにしへの御代の教にもとづきてひらけゆく世にたゝむとぞ思ふ

しほどきになりにけらしも濱どのゝかきね近くも波のおとする

初春風

梅にふれ柳にふれてきのふけふ風のこゝろも春になるらし

老梅

さむしとてこもるべしやは枝くちし老木のうめも花さきにけり

春田

いくか經てかへしはつべき小山田にたてるをのこの數のすくなき

寄夏草述懷

國のため民の爲には夏草のことしげくともつとめざらめや

月夜遠情

外國の野邊のたむろにこの秋も月やみるらむわがいくさびと

天

すめるもの昇りてなりし大空にむかふ心も清くぞありける

嶺上雲

とほければ風のひゞきはきこえねどたかねの雲の動きそめたる

曉

曉のねざめのとこにおもふこと國と民とのうへのみにして

原

山よりもさびしきものは限りなき荒野の原をゆく日なりけり

波

あるゝかと見ればなぎゆく海原のなみこそ人の世に似たりけれ

草

うとましと思ふ葦はひろごりて植ゑてし草の根はたえにけり

歌

戰のいとまある日はものゝふも言葉の花をつむとこそきけ

ひとりつむ言の葉草のなかりせばなにゝ心をなぐさめてまし

新しきふしはなくとも呉竹のすなほならなむ大和ことの葉

むらぎもの心のうちに思ふことといひおほせたる時ぞうれしき

旗

くもりなき朝日のはたにあまてらす神のみいつをあふげ國民

蘆間舟

とる棹のこゝろ長くもこぎよせむ蘆間の小舟さはりありとも

述懷

末つひにならざらめやは國のため民のためにとわがおもふこと

寢覺述懷

ゆくすゑはいかになるかと曉のねざめ〳〵に世をおもふかな

民

國の爲いよ〳〵はげめちよろづの民もこゝろをひとつにはして

心

すなほなるをさな心をいつとなく忘れはつるが惜しくもあるかな

神祇

世の中にことあるときぞしられける神のまもりのおろかならぬは

寄國祝

うけつぎて守るもうれし千早ぶる神のさだめしうらやすの國

寄民祝

民草のしげりそふこそ葦原の國のさかゆくもとゐなりけれ

誠

とき遲きたがひはあれどつらぬかぬことなきものは誠なりけり

勇

ちよろづの仇にむかひてたわまぬぞ大和をのこの心なりける

思

國民のうへやすかれとおもふのみわが世にたえぬ思なりけり

凱旋の時

外國にかばねさらしゝますらをの魂も都にけふかへるらむ

折にふれて

おのづから仇のこゝろも靡くまで誠の道をふめや國民

老人を家にのこしていくさびと國のためにといづるをゝしさ

思ふことつらぬかずしてやまぬこそ大和をのこのこゝろなりけれ

國の爲いのちをすてしものゝふの魂や鏡にいまうつるらむ

萬代もふみのうへにぞのこさせむ國につくしゝ臣の子の名は

天地の神にぞいのる民のため雨風ときにしたがひぬべく

久方のあめにのぼれるこゝちしていすゞの宮にまゐるけふかな

さくすゞの五十鈴の宮の廣前にけふおほ幣をさゝげつるかな

えぞのおく南の島のはてまでもおひしげらせよわがをしへ草

海邊若草

白波のよせてはかへるまさごぢにいつ若草の生ひいでにけむ

行路薄

いづくをかわけてきつらむかへりみる野みちはすべて薄なりけり

折にふれて

國のためうせにし人を思ふかなくれゆく秋の空をながめて

天

ひさかたの空はへだてもなかりけりつちなる國はさかひあれども

鄰

さしなみのとなりにかよふ道ならむ籬の竹のひまのみゆるは

さしなみのとなりの人をたのみにてひとりや老が庵にすむらむ

射

梓弓ひきしぼりても放つ矢の的を貫く音のをゝしさ

弓　矢

ゆみやもて神のをさめしわが國にうまれしをのこ心ゆるぶな

教　育

年々にひらけゆく世のをしへ草身のほど〳〵に摘ませてしがな

いかならむときにあふとも人はみな誠の道をふめとをしへよ

心靜延壽

しづかなる心のおくにこえぬべき千年の山はありとこそきけ

社頭祝

さくすゞの五十鈴のみやの神風のふきそはる世ぞうれしかりける

神祇

日の本の國の光のそひゆくも神の御稜威によりてなりけり

國民のうへやすかれと思ふにもいのるは神のまもりなりけり

かみかぜの伊勢の宮居を拜みての後こそきかめ朝まつりごと

折にふれて

國のためたゝれずなりし民草に惠の露をかけなもらしそ

むらぎもの心たゆまず進みなばさがしき山も越えざらめやは

歳月は射る矢のごとしものはみなすみやかにこそなすべかりけれ

夕立

俄にも照る日のひかりかきくらしいらかをたゝく夕立のあめ

夕立過

夕立の雨は高嶺をこえにけり並木の松に風をのこして

夏田家

つばめとぶ影のみ見えて田うゑ時家に人なき小山田の里

秋風滿野

遠山の雲も動きて秋の野のちはらかやはら風わたるなり

對月

むかしいま思ひあつめてつくゞとふけゆく月をながめつるかな

寒松

こがらしの風にすまひてひとつ松いくらの冬をしのぎきぬらむ

道

いとまあらばふみわけて見よ千早ぶる神代ながらの敷島の道

絶えたりとおもふ道にもいつしかとしをりする人あらはれにけり

なかばにてやすらふことのなくもがな學の道のわけがたしとて

おのが身を修むる道は學ばなむしづがなりはひ暇なくとも

ゆるされてまなびの窓をいづる子よ思はぬ道にふみな迷ひそ

橋

山川の早瀬の波のたちまちに橋うちわたすいくさ人かな

磯岩

いそざきはかくれ岩こそ多からめよせくる浪のくだけてはちる

磯松

波風をしのぎ〳〵て荒磯の松はちとせの根をかためけむ

書

いにしへの文の林をわけてこそあらたなるよの道もしらるれ

歌

おもふことうちつけにいふ幼兒の言葉はやがて歌にぞありける

天地もうごかすといふことのはのまことの道は誰かしるらむ

ことのはのまことのみちを月花のもてあそびとは思はざらなむ

船

棹とりて過ぎ行く人はありながら小舟はみえず蘆にかくれて

海上舟

いづこより漕ぎいでぬらむたゞひとつ沖にうかべる海士のつり舟

ひとりして早瀬をくだす筏にはかへりて波もかゝらざりけり

述懷

事しあらば火にも水にもいりなむと思ふがやがてやまとだましひ

うつせみの世はやすらかにをさまりぬ我をたすくる臣のちからに

世の中をおもふたびにも思ふかなわがあやまちのありやいかにと

親

たらちねの親の心をなぐさめよ國につとむる暇ある日は

たらちねのみおやの教あらたまの年ふるまゝに身にぞしみける

庭訓

たらちねのにはの教はせばけれどひろき世にたつもとゐとぞなる

師

わけのぼる道のしをりとなる松は位なくてもうやまはれけり

神祇

目に見えぬ神にむかひてはぢざるは人の心のまことなりけり

めにみえぬかみの心に通ふこそひとの心のまことなりけり

孝

たらちねの親につかへてまめなるが人のまことの始なりけり

折にふれて

萬代にうごかぬものはいにしへの聖のみよのおきてなりけり

世の中の人におくれをとりぬべしすゝまむときに進まざりせば

よの人を導くまではあらずとも進まむ時におくれざらなむ

暇あればまづこそ思へ戰にたゝれずなりし人はいかにと

かみつよの御代のおきてをたがへじと思ふぞおのがねがひなりける

開けゆくときにいよ〳〵仰がれぬ聖の御代のたかきをしへは

海邊蟲

浪のおと遠ざかり行くひきしほにむしのねたかし濱の松原

星

見るまゝに數そふものは大空につらなる星の影にぞありける

山路杉

家すこしあるかと見れば山道はまた杉村になりにけるかな

歌

まごゝろをうたひあげたる言の葉はひとたびきけば忘れざりけり

述懷

千萬の民の力をあつめなばいかなる業も成らむとぞ思ふ

寄道祝

葦原のみづほの國の萬代もみだれぬ道は神ぞひらきし

折にふれて

ものごとにうつればかはる世の中を心せばくはおもはざらなむ

わが心われとをり〳〵かへりみよしらず〳〵も迷ふことあり

くろがねの的いし人もあるものをつらぬきとほせ大和だましひ

夜落花

あかずして庭にたかする篝火のうへともいはずちる櫻かな

蟲

ひとりして靜かにきけば聞くまゝにしげくなりゆくむしの聲かな

社頭紅葉

もみぢばの赤き心を靖國の神のみたまもめでゝみるらむ

田家時雨

おほねほすしづが垣根の夕日影にはかにきえて時雨ふるなり

日

さしのぼる朝日のごとくさわやかにもたまほしきは心なりけり

雲

あつまると見れば離るゝ大ぞらの雲にも似たるひと心かな

河

國民もつねに心をあらはなむみもすそ川の清き流に

國

よきをとりあしきをすてゝ外國におとらぬ國となすよしもがな

柱

橿原のとほつみおやの宮柱たてそめしより國はうごかず

巖上松

あらし吹く世にも動くな人ごゝろいはほに根ざす松のごとくに

船

あまの子が漕ぐや小舟の輕ければかへりて波もしづめざるらむ

沈むかとみれば浮びぬ波あらき磯こぎめぐる海士の釣舟

述懷

やき太刀のとつくに人にはぢぬまで大和心をみがきそへなむ
ひろき世にたつべき人は數ならぬことに心をくだかざらなむ
かたしとて思ひたゆまばなにごともなることあらじ人のよの中
戰のかちにほこりてむらぎもの心ゆるぶなわがいくさびと

寄道述懷

ふむことのなどかたからむ早くより神のひらきし敷島の道

寄書述懷

すゝみゆく世におくれなばかひあらじ文の林はわけつくすとも

仁

いつくしみあまねかりせばもろこしの野にふす虎もなつかざらめ

や

義

身にあまるおも荷なりとも國の爲人のためにはいとはざらなむ
おのが身はかへりみずして人のため盡すぞひとの務なりける

誠

鬼神もなかするものは世の中の人のこゝろのまことなりけり

萬物感陽和

草も木も萠ゆるをみれば春風に動かぬものはなき世なりけり

月前遠情

あた波をうちしりぞけしいくさ人南の島の月やみるらむ

雲

山かぜにふきたてられて谷底にしづみし雲もまたおこりけり

島

ちかづけば家もありけり波の上に浮ぶとみえし沖の小島も

國

おごそかにたもたざらめや神代よりうけつぎ來るうらやすの國

詞

きゝしるはいつの世ならむ敷島のやまと詞の高きしらべを

人

をちこちにわかれすみても國を思ふ人の心ぞひとつなりける

工

外國におとらぬものを造るまでたくみの業にはげめもろ人

教育

わがしれる野にも山にもしげらせよ神ながらなる道をしへぐさ

心

ひろき世にまじはりながらともすれば狹くなりゆく人ごゝろかな

夢

たらちねの親のみまへにありとみし夢のをしくも覺めにけるかな

神祇

わが國は神のすゑなり神祭る昔の手ぶり忘るなよゆめ

とこしへに國まもります天地の神の祭をおろそかにすな

寄神祝

あまてらす神の御光ありてこそわが日のもとはくもらざりけれ

寄國祝

萬民こゝろあはせて守るなる國にたつ身ぞ嬉しかりける

忠

まめやかにつかふる臣のあればこそわがまつりごとみだれざりけれ

折にふれて

ひと筋をふみて思へばちはやぶる神代の道もとほからぬかな

千鳥

川ぞひのもりの夜嵐なぎぬらし遠き千鳥のこゑのきこゆる

河

岩がねをきりとほしても川水は思ふところに流れゆくらむ

國

天つ神定めたまひし國なればわがくにながらたふとかりけり

世はいかに開けゆくともいにしへの國のおきてはたがへざらなむ

神祇

千早ぶるかみの力によりてこそわれをたすくる人もいでけれ

折にふれて

思ふことといふべき時にいひてこそ人のこゝろもつらぬきにけれ

教草しげりゆく世にたれしかもあらぬ心の種をまきけむ

いそのかみ古きてぶりをのこさなむ改めぬべきこと多くとも

むらぎもの心のかぎりつくしてむわが思ふことなりもならずも

雲

一村と思ひし雲のいつのまにあまつみそらをおほひはてけむ

道

すゝむにはよし早くともあやふしと思ふ道には入らずもあらなむ

ともすればさまたげられて一筋にゆかれぬものは道にぞありける

人の世のたゞしき道をひらかなむ虎のすむてふのべのはてまで

きゝしより遠しと思ふはゆくさきに心のいそぐ道にぞありける

柱

かりそめの事に心をうごかすな家の柱とたてらるゝ身は

教育

よきたねをえらびくて教草うゑひろめなむのにもやまにも

孝

いとまなき世にはたつともたらちねの親につかふる道な忘れそ

折にふれて

敷島のやまと心をみがけ人いま世の中に事はなくとも

身をすてゝいさををたてし人の名は國のほまれと共にのこさむ

あやまたむこともこそあれ世の中はあまりにものを思ひすぐさば

敷島のやまと心をうるはしくうたひあぐべきことのはもがな

おもふこと思ふがまゝにいひてみむ歌のしらべになりもならずも

なすことのなくて終らば世に長きよはひをたもつかひやなからむ

大正天皇

社頭杉

さくすずのいすずのみやにしげりあひてたてる神杉いくよへぬらむ

寄國祝

としどしにわが日の本のさかえゆくもいそしむ民のあればなりけり

遠山雪

雪白きふじのたかねのみゆるかなかしこどころの松のこずゑに

海邊松

汐風のからきにたへて枝ぶりのみなたくましき磯の松原

朝晴雪

ゆたかにも雪ぞつもれる秋津しまめぐりの海は朝なぎにして

田家早梅

冬ながらかきねのくさももえいでてたなかのいほの梅の花さく

社頭曉

かみまつるわが白妙のそでの上にかつうすれゆくみあかしのかげ

今上天皇

社頭曉

とりがねに夜はほのぼのとあけそめて代々木の宮のもりぞみえゆく

旭光照波

世の中もかくあらまほしおだやかに朝日にほへるおほうみのはら

曉山雲

あかつきにこまをとどめて見渡せば讃岐のふじに雲ぞかゝれる

新年言志

あらたまの年を迎へていやますは民をあはれむ心なりけり

山色連天

たて山の空に聳ゆるををしさにならへとぞ思ふみよのすがたも

河水清

廣き野をながれゆけども最上川うみに入るまでにごらざりけり

山色新

山やまの色はあらたにみゆれども我まつりごといかゞあるらむ

田家朝

都いでてとほく來ぬれば吹きわたる朝風きよし小田のなか道

海邊巖

いそ崎にたゆまずよするあら波を凌ぐいはほの力をぞ思ふ

社頭雪

ふる雪にこころきよめて安らけき世をこそいのれ神のひろまへ

曉雞聲

ゆめさめて我世をおもふあかつきに長なきとりの聲ぞきこゆる

朝海

天地の神にぞいのる朝なぎの海のごとくに波たたぬ世を

池邊鶴

樂しげにたづこそあそべわが庭の池のほとりや住みよかるらむ

海上雲遠

紀の國のしほのみさきにたちよりて沖にたなびく雲をみるかな

田家雪

みゆきふる畑のむぎふにおり立ちていそしむ民をおもひこそやれ

神苑朝

靜かなる神のみそのの朝ぼらけ世のありさまもかかれとぞおもふ

朝陽映島

高どののうへよりみればうつくしく朝日にはゆる沖のはつしま

迎年祈世

西ひがしむつみかはして榮ゆかむ世をこそいのれとしのはじめに

漁村曙

あけがたの寒きはまべに年おいしあまも運べりあみのえものを

通峯雲

峯つゞきおほふむら雲ふく風のはやくはらへとたゞ祈るなり

農村新年

ゆたかなるみのりつゞけと田人らもかみにいのらむ年をむかへて

落丁その他不良本はいつでもお取りかへいたします。

昭和十八年七月二十五日　印刷
昭和十八年七月三十日　發行

歴代御製集（並製）　㊟定價　金七拾錢

編纂者　大政翼贊會施設部　代表者　岩松五良
發行者　大政翼贊會宣傳部　代表者　橋本芳藏
東京都麹町區霞ヶ關三丁目一番地

印刷者　大文堂合名會社　代表者　田村良知（東東二〇六）
東京都小石川區白山御殿町一八番地

發行所　大政翼贊會宣傳部
東京都麹町區霞ヶ關三丁目一番地

發賣所　翼贊圖書刊行會　東京都神田區駿河臺四丁目二番地　振替口座東京一四三六八〇番

972
195

終